

『王太子様の白猫花嫁』

著：ゆりの菜櫻

ill：古藤嗣己

『大陸創世記』によると、昔、このガゼリア大陸に、ある神が降り立った。

当時、大陸は大小さまざまな国が乱立して戦いに明け暮れていたが、神は大きな獣、聖獣に姿を変えて国々を制し、平和をもたらした。そして神は一人の人間と結婚し、生まれた子供にそれぞれ国を統治するように命じたとされている。

今、ガゼリア大陸には大小二十三の国があるが、うち十の国は神の血を持つ国として別格で扱われている。

神の子孫が祖となる王族には古の血の証しとして、聖獣に姿を変えることができる『先祖返り』が時々生まれているからだ。それはガゼリア大陸にしか存在しない特別な人間であり、ガゼリア大陸が他の大陸から『神の住む大陸』と呼ばれる由縁でもある。

だが古き王国の中でも盛衰の差は激しく、大国の庇護でどうにか存続できる国もあれば、ヴィンセントの故郷、アスタルス王国のように絶大な勢力を持って、その権威を大陸中に行き渡らせている国もあった。

十年ほど前から、アスタルスは大陸の平和を維持するために、各国から王子王女を呼び寄せて人質として預かり、他国と平和協定を結ぶようになった。

これによって一時的に平和が保たれたように見えたが、実際はそれでも争いの火種が燻っており、まだまだ多くの課題が残っているのが現状であった。

* * *

柔らかな風が淡い色の髪をそっと撫で、空へと舞い上がっていく。

ユリアスはアメジストのように輝く魅惑的な紫の瞳を、青い空へと向けた。

アスタルス王国へ留学という名目で人質になって九年の月日が経つ。子供の頃から美しいと称えられてきたユリアスは、青年といわれる年齢になってもその美しさが失われることはなかった。

さすがに今は女性と間違えられることはなくなったが、その白皙の美貌は健在で、姿を見れば誰もが息を呑むほどになっていた。

『ビジャールの客人は、いずれは王太子を誑かす毒となろう』

そんな言葉が、ひそかにこの国の社交場で囁かれ、王太子、ヴィンセントとの関係を囁し立てる者が出るほどだ。

今日、ユリアスはある伯爵夫人が主催するサロンに呼ばれていた。華やかなそれは、残念ながらユリアスの心を掴むほどのものではなかったが、王城に閉じ籠もってばかりいると、気が滅入るのも確かで、ユリアスは時々こうやって気の向くまま、いろんなサロンに顔を出していた。

「どうされました？ ユリアス様」

空を見上げていると、一人の貴婦人が近づいて声を掛けてくる。

「いえ、空がとても青くて綺麗だなと思い、見ておりました」

「ふふ……。面白いことをおっしゃるのね。あちらでベルゼール様がピアノをご披露してくださるそうよ。いらして」

「ええ、すぐに参ります。マダム」

ユリアスは極上の笑みを貴婦人に向けた。すると彼女が少し頬を赤らめ、ちらりと意味ありげな視線を寄越す。だがユリアスはそれに気付かぬ振りをして、視線を空へと戻した。

もうそんな色を含む視線を躲すことには慣れていた。

ユリアスがこの国へ来てから既に九年。一緒に留学していた王子、王女はこの九年の間に入れ替わり、人質の顔ぶれは大きく変わっていたが、ユリアスだけはどうしてもか帰国を許されず、未だアスタルスに残っている。今やユリアスも、そしてこの国の王太子でもあるヴィンセントもとうに成人し、二十二歳となっていた。

人質といっても待遇はいい。護衛という名の監視人を連れてなら外出が許されるし、王城内では客人扱いだ。だがそれでもユリアスの心は安らいだことはない。

理由は幾つかあるが、一番は、ユリアスが持つ秘密のせいであった。

秘密——。それはユリアスが先祖返りで聖獣、白猫の血を色濃く受け継いでいるという、誰にも知られてはいけないトップシークレットのものである。

先祖返りは吉兆の証しといわれ、各王国とも、先祖返りの子供が生まれると、皆が国の繁栄を約束されたと慶事として受け止める。

ユリアスの国、ビジャール王国は、代々神の血が流れているとされる由緒正しい王国だ。そのため古くから王族には、時々先祖返りが生まれていた。

ユリアスもその一人であった。ただユリアスの場合、姉の第一王女も先祖返りで、孔雀の聖獣であった。

孔雀は女王陛下の聖獣といわれており、国を繁栄に導くのに最も良い先祖返りとされている。一方、白猫の先祖返りは女子のほうが力は強く、男子は女子のそれに対して、おこぼれ程度の力しかないと言われていた。そのためユリアスは先祖返りとして生まれたのにもかかわらず、姉の陰に隠れ、あまり重要視されていなかった。

ユリアスがこうやって国の外に出されてしまったのも、そういう経緯があったからだと自分では納得している。

だがそんな中途半端な力であろうとも、他の人間にとっては白猫の先祖返りであることには間違いない。欲望まみれの人間からは男子の白猫も魅力的な存在であった。

白猫は、手に入れると、その主人に地位と財産、名誉、そして幸福をもたらすといわれており、多くの人々が最も欲する聖獣である。しかも聖獣の中で一番攻撃力が弱く、人間とさほど変

わらない戦闘能力であるために、昔から狙われやすい聖獣の一種でもあった。

先祖返りそのものが少ないのに、その中でも白猫を探すのは至難の業で、一度見つければ誘拐されたり、闇市で売り飛ばされたりなど犯罪に巻き込まれることが他の聖獣に比べて多いとされている。

ユリアスも自分が白猫の先祖返りであることを他人に教えようとは思わなかった。知られたら、それがどこかに広まり、犯罪に巻き込まれてしまう可能性が高いからである。

使用人もそうだ。自分の身の周りの世話をする人間は、何だかんだと理由をつけて、故郷から一緒に来た従者、シャンダに任せていた。なるべく先祖返りであることを他者に知られないためだ。

十分に注意をしているお陰か、未だアスタルス王国の人間にはユリアスが先祖返りであることを誰にも知られていなかった。ただし、一人を除いてではあるが――。

「ユリアス様、まだここにいらしたのですね」

再び声が掛かり、そちらへ視線を移すと、先ほどの貴婦人が立っていた。そのままユリアスがいるバルコニーへとやってくる。

「ピアノの演奏会、ご興味はありません？ 実はわたくしも、ですよ」

必要以上に躰を寄せてきた。あまりにあからさまで、ユリアスもつい苦笑してしまう。

「そうなんですか？ マダム」

「ねえ、でしたら、わたくしと少しお喋りいたしません？」

しっとりとした声でユリアスの胸に手を這わせてきた。

「申し訳ありません。大変魅力的なお誘いですが、実は先ほどから少し頭痛がしておりまして、ここで休んでおりました。なかなか痛みが治まりませんので、今日はこのままお暇しようかと」

ユリアスはふわりと笑みを浮かべると、自分の胸にあった彼女の手をそっと掴んだ。そしてその手の甲にキスをする。

「貴女のような魅力的な女性の誘いをお断りすることをお許してください」

「え……ええ、頭痛はお辛いですものね。お大事にしてくださいませ、ユリアス様」

「ありがとうございます、マダム。ではこれで失礼します」

彼女の手を名残惜しそうに見えるよう放し、ユリアスはバルコニーから部屋へと戻った。このままホストである伯爵夫人に挨拶をして帰れば、誘いを断ったあのマダムの面目も立つだろう。

ユリアスはこの容姿のお陰で、老若男女にもてた。ベッドの誘いは数えきれないほどあるが、全部断っている。そのため社交界では『鉄壁の花』とまでいわれていた。

それで結構だ。爛れた関係を好む貴族と遊びの恋を愉しむ趣味はない。それに、その最中に白猫の耳や尻尾が出ることもあるので、他人と肌を合わせるのは無理だった。無理だと教えられた。彼に――。

はあ……。

そこまで思い至って、ユリアスは心の中だけで大きな溜息を零した。

どうして耳や尻尾があの中に出してしまうとわかったかという原因を思い出したからだ。

ヴィンセントだ。

聖獣は幼獣から成獣になる際に、発情期を迎えるようになる。発情期が来てこそ、大人と認められ、普通は吉事として受け止められる。

だがユリアスの場合、三年前、運の悪いことにヴィンセントと二人だけにいる時に、それが来てしまい、そのままなし崩しに肌を重ねてしまったのだ。

その折に、快感に任せて耳や尻尾が出ることを知り、以後、白猫の先祖返りである事実を知られないよう、他人とは寝ないと心に決めた。

そしてその後も発情期とは関係なく、彼とはセックスをする関係が続けている。

そう、爛れた関係を好む貴族と遊びの恋を愉しむ趣味はないと言いつつ、自分も爛れた関係をヴィンセントと続けていた。

はあ……、初めて発情した時に、傍に彼がいなかったら、こんな淫らな関係を結ぶことにはならなかったのになあ……。

あれは一生の不覚であった。

ユリアスは何度目かわからない溜息をまたつき、サロンを後にしたのだった。

ユリアスが王城に戻ってくると、従者のシャンダからヴィンセントが外交を終え、帰城したと教えてもらった。

「予定より早いな」

「懸案事項が思ったより早く解決したそうで、今、お躰を清めに行かれました。ユリアス様にはすぐにお会いしたいと伝言を承っております」

「わかった。あいつのことだ。どうせ入浴には時間が掛かるだろう。私も着替えてから会いに行こう」

「かしこまりました」

ユリアスがシャンダを連れて自室に戻る途中、他国からの留学生が集う広間を横切ると、皆がヴィンセントの話をしていて、つい、耳を傾けてしまう。

「ヴィンセント王子、今回もかなりこの国に有利になるよう交渉を成立させたいぞ」

「アスタルス王国は安泰ね。私の国なんて、不況が続いて大変なのに」

「だから私たちがここでしっかり政治や経済を学んで、自国に持って帰るようにしなきゃいけないんじゃないか。弱音なんて吐いている場合じゃないよ」

自分たちが人質だと気付いているのかいないのか、そんな話が聞こえてくる。

「あ、ユリアス！」

そのうちの一人がユリアスに気付き、声を掛けてきた。

「今、帰ったの？」

「ああ、君たちは今日もちゃんと勉強したかい？」

「したわ。でも今日の授業、財務管理なんて王女の私に必要かしら。あんなの役人に任せておけばいいでしょう？」

近隣諸国の一つ、アマリ王国の王女が、不服そうに訴えてきた。

「そうかもしれないが、知らないより知っていたほうがいいと思うよ。いざ、誰かが不正をしていた時に自分で確かめられるだろう？ あってはならないことだけど、誰も信じられない時があるかもしれないから」

「そ、そうね……」

「君は成績がいいんだから、嫌がらずに色々と学んでみたらいいよ」

「……え、ええ」

少女が照れを上手く隠しきれない様子で、小さく頷いた。祖国にいる七歳下の妹を思い出し、ユリアスもつい微笑んでしまう。

ユリアスは彼らと同じ留学生という立場だが、三、四年で入れ替わる他の王子や王女と違って九年もいるので、彼らとは歳の差がかなりある。一番下は十歳で、一番年上の王子でも十六歳でユリアスとは六歳も歳の差があった。結局、ユリアスは現在、彼らにとって兄のような存在になっている。

「ヴィンセント王子のところへ行くの？」

「ああ、帰ってきたって聞いたからね」

「ユリアス、ヴィンセント王子と特別仲がいいわよね。妬けちゃう」

「妬けちゃうって……どういう……」

「こんなところにいたのか、ユリアス」

「わっ……」

いきなり背後から抱きつかれ、びっくりした。振り向かなくとも誰だかわかる声に、ユリアスは文句を言う。

「ヴィンセント、急に抱きつかないでくれないか？ 驚くじゃないか」

彼の腕を解きながらユリアスは反転し、彼を睨みつけた。

「気を抜いているお前が悪い」

そこには、どこかの人気舞台俳優のような男の色香を振りまく青年が立っていた。四肢が長く、スタイルもいい。更にすらりとした体躯には意外ときっちり筋肉がついていることをユリアスは知っている。ベッドの上で教えられた。

陽の光を受けて輝くのは彼の銀の髪だ。形の良い眉の下には鋭い蒼い瞳があるが、二重のせいか絶妙な甘さを感じ、女性には見つめられると心臓が止まりそうなどと評される代物である。

大国の王子としての才覚も充分あり、今や大陸全土でも名を馳せるほどの王太子となっていた。

そんな彼に対して、幼馴染みとして対等に口を利くユリアスもまた、周囲から一目置かれている佳人だ。

ヴィンセントは笑いながら、ユリアスを今度は正面から抱き締めてきた。

「久しぶりだな、ユリアス。相変わらず不機嫌そうで何よりだ」

「何が、不機嫌そうで、だ。君が驚かせるからだろう？」

彼の腕から逃れようともがくと、思ったより簡単に抜け出せた。どうやら彼もユリアスを拘束し続けようとは思っていなかったようだ。

「ヴィンセント王子、お帰りなさいませ」

それまでお喋りをしていた留学生たちが、ヴィンセントの前で整列をし、頭を下げた。

大国の王子となれば、他の王族の子女たちよりも更に格が上だ。ここにいる王子、王女はそれを自然と肌身で感じているようで、ユリアスに対する態度とヴィンセントに対するそれとは大きく差があった。それに彼らが『王子』と呼ぶのもヴィンセントに対してだけだ。

「ああ、ただいま。土産を持ってきたから、後でルシアンから貰ってくれ」

ルシアンというのはヴィンセントの補佐官のことだ。

「ありがとうございます！」

皆、頬を紅潮させる。

「ではユリアスを少し借りるよ」

ヴィンセントはついでとばかりにユリアスの腕を取ると広間を後にした。

「なかなか来ないからどこにいるかと思ったら、こんなところで寄り道か？」

ユリアスの手を掴まえたまま、前を歩くヴィンセントが小声で話し掛けてくる。

「寄り道って……少し皆に声を掛けたただけだぞ。一応、私も『留学生』の一人だからな。仲間は大切にしないと」

嫌みのように『留学生』を強調してやる。だがヴィンセントはフンと鼻でそれを笑って、言葉が続けた。

「仲間なら私のほうがお前との縁は長いぞ。私を優先すべきだ。お前との逢瀬の邪魔をされるのは気に入らない」

「どさくさに紛れて逢瀬なんて言うな。大体、君は私の前だけでは、わがままなことを言うよな」

ユリアスの声にヴィンセントが振り返ってきた。

「気を許しているからだよ」

ああ言えばこう言うで、口が達者だ。思わずユリアスはムッと口を歪ませた。すると彼が笑った。

「ほら、お前も私の前だけ、そんな子供っぽい顔をする。お前も私に対して気を許しているということだ」

益々口が歪みそうになるが、どうにか耐えていると、それさえも面白いようで、とうとうヴィンセントが声を出して笑った。

「相変わらずユリアスは可愛いな」

「君も相変わらず、口が達者だな」

「そんなに褒めてくれるな」

「褒めていない。呆れているだけだ」

そう言ってやると、ヴィンセントがちらりとかちらに視線を向け、既に到着していた自室のド

アを開けた。

「えっ？」

いきなり手を引っ張られ、部屋に引き摺り込まれた途端、唇を奪われる。そのまま扉を閉め、その扉に背中を押し付けられた。

「んっ……」

顎を持ち上げられ、角度を変えて口腔を弄られる。ひとしきり好き勝手に貪られ、やっとキスから解放された。

この性急さに、ユリアスは心当たりがあった。

「なっ……、まさか君、発情期！」

「そのようだ」

冷静そうに見えるが、よく観察すると、ヴィンセントの蒼い瞳に劣情の焰が揺らいでいるのがわかる。

「はあ……よくそんな状態で戻ってきたな。まさか、見ず知らずの他人の閨を襲ったりはしなかっただろうな。落胤騒ぎは面倒だぞ」

「人を性欲魔人のように言うな」

「性欲魔人のくせに」

言い返すと、ヴィンセントはしばらく考えているような仕草を見せ、そしてふむと頷いた。

「……確かに。お前に限定すれば、否定はできないな」

「どうして私限定なん……んっ……」

再び口を塞がれる。キスの合間合間に、ユリアスは文句を言った。

「獅子の……んっ……発情期は……はっ……ん……多すぎるぞ」

「そんな苦情は神に言え」

「もうっ、きちんと陛下に今回の条約締結の報告は済ませたんだな？」

「ああ、済ませた。だから早くお前をくれ」

ヴィンセントは獅子の先祖返りだ。獅子は聖獣の中でも発情期の回数が多く、性欲が強いとされていた。だが性欲が強ければ、それだけ能力も高く、さすが大国のアスタルスの世継ぎだと誰もが称賛していた。

対して白猫のユリアスの発情期は年に二回ほどだ。発情期でなければセックスをしないという訳ではないが、どちらかというとな淡泊なほうだった。

しかしユリアスだけ発情期にヴィンセントに協力してもらっているのはフィフティフィフティじゃないとして、ユリアスもヴィンセントの発情期中には協力することになっている。

けれど相手は獅子。発情期はほぼ通年で、一年中、彼と躰の関係を持つという爛れた生活を送っていた。

「限界だ、ユリアス。抱きたい——駄目か？」

辛そうに見つめてくるヴィンセントにユリアスも可哀想になり、その頬に手を添えた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>